SDGsとの向き合い方

Japan－YWP「水×SDGs」ワーキンググループ

令和の時代の水を展望する上で、当面のキーワードとなるのがSDGs（国連持続可能な開発目標）だ。上下水道分野を中心にした若手の集まりJapan-Young Water Professionals（Japan－YWP 浅田安廣代表）では「水×SDGs」ワーキンググループを立ち上げ、SDGsとの当事者としての関わり方を模索してきた。ワーキンググループの取組みと参加者の声から上下水道関係者のSDGsとの向き合い方を考える。

水×SDGs 取組みの概要

Japan－YWP総務委員 立命館アジア太平洋大学助教 平野 実晴氏

分野の垣根を越えて議論

エス・ディー・ジーズとは何か？

SDGsというアルファベットが目に付くようになってきました。政府も掲げていますし、メディアに映る企業の役員はバッジを胸につけています。私たちの暮らしの近くで行われる地域の活動でも、つながりが意識されるようになっています。このSDGsのディー（Development）は、日本が途上国に対して支援する「開発」と他者間の意味で理解されることが多いですが、自動詞の意味で自分が「発展」するというニュアンスも含まれています。

持続可能な「発展」目標（SDGs）は、国連の総会という193加盟国が参加してものごとを決める場で採択された決議の中に含まれています。この文章名にある通り、SDGsは「我々の時代を変革（Transform）する」ためのもので、諸国の代表が「われわれの国民に代わり、包括的、遠大かつ人間中心な一連の普遍的かつ変革的な目標とターゲットにつき、歴史的な決定」を行いました。民主主義に基づく社会に生きていると感じている以上、私たちが代表を通じて合意した世界のあるべき姿に向かって、自分たちのこととして取り組む必要があるのではないでしょうか。

日本の上下水道は十分に行き届いているので、SDGsは関係ないのでは。そういう声も聞かれます。しかし水業界で読まれている情報誌では、よく「今山」の例え話があります。本当に、SDGsに書かれている内容は自明で、水についてはすでに達成されていて、そして明日で、2030年で、2050年になっても、達成され続けた状態が確保できるのでしょうか？こうした思い、そして疑問から始まったのが、「水×SDGs」と名付けられたイニシアチブです。

なぜ今「水×SDGs」か？

SDGsは「目標設定によるガバナンス」（蟹江憲史）と言われている次世代型の枠組みです。行為を規制する法的ルールも大事ですが、われわれが望む将来像について合意し、そこへ向かって共に取り組むムーブメントがあってこそ、課題の解決へつながるのではないかと思います。日本の上下水道行政では、「ビジョン」が出されてきましたがSDGsの場合は、水に限られない多様な17の目標、その下に169ものターゲットがありますので、幅広い視点から将来像を見通すのに有益です。

2018年に行った当初の勉強会で参加者から出された主な意見には、例えば「どこまで上水のサービスを目指すか？」、あるいは「市民の方々の協力をどうやって得るか？」といった本質的な疑問がありました。SDGsをきっかけに議論と向き合いつつ、同時に垂直にならないよう、何を目指すどこに妥協点を置くかが問われていると感じました。また、SDGsに書かれている「アクセス」や「レジリエンス」の意味、指標の活用方法、各アクターの役割などについて、参加者の関心が多いことが分かりました。

SDGsについてはすでに広く語られている一方で、抽象的すぎる議論も少なくありません。また、最近は「SDGsウオッシュ」、つまり上辺だけでSDGsを語ることに注意せよとの警鐘が鳴らされています。私たちが単に「SDGs」と叫ぶだけでなく、上下水道へと落とし込み、具体的に使い方を提示する必要があるのではないか。SDGsを「日本ごと」そして「自分たちごと」にしていくには、議論をじっくり掘り下げる必要があるだろう。こうした意見を踏まえ、2019年初めにワーキンググループを立ち上げ、継続的に議論を行うことになったのです。Japan－YWPでは、初となるパイロット的な取組みです。

2019年に24歳の若者は、2030年に35歳、2050年になってやっと55歳です。私たちが活躍する将来を見据えれば、SDGsは一つのステップに過ぎません。Japan－YWPという若手の間でSDGsを建設的に批判することで、2030年に終わるSDGsの次、Post－2030を見据えた2050年への足掛かりにもしたいと考えています。

ワーキンググループの活動

Japan－YWPは、水に関する多様な専門を持った若手の集まりですし、加えてワーキンググループには水を専攻の専門としない方々にもご参加いただいています。そのため、「水×SDGs」は専門的知見と多様な意見を集約する場を提供しています。運営に際しては、話し合いが前向きになるように、自由な発想を大事にすると同時に、他人の意見を尊重すること、自分ごととして考えるようにすること、チャタムハウス・ルール（外部で議論の内容を引用しない）を参加の原則にしています。

ワーキンググループでは、日本の課題を念頭に置きつつ、上下水道に関わる私たちみんなで目指したい将来像を描くという大きな目標があります。もちろん、われわれで一から考えるのは困難です。そこで、国連で定められたSDGsの169ターゲットを上下水道の視点から読み解き、参考にすることで、日本の文脈に落とし込みやすい整理ができないか、1～2カ月に1回のワークショップを重ね、考えてきました。

成果は来年1月に予定されているJapan－YWP設立10周年記念イベントなどで公表していく予定ですので、ご期待ください。

日本ごと、自分たちごとに

ワーキング運営委員の思い

「水」認知度高めるため

後藤 正太郎

私が水に興味を持ったきっかけは、学生時代における開発途上国での経験です。当時、SDGsの前身となるMDGs（ミレニアム開発目標）のデータを通して、開発途上国における水の問題を認識しました。しかし、MDGsで掲げられた八つの目標の中には、水のみについて言及したものはなく、21のターゲットの中の一つに水がありました。水に対する問題認識が希薄だったように感じます。

SDGsでは、水に特化した目標が掲げられました。また、MDGsは開発途上国に特化した目標であった一方で、SDGsでは先進国も対象となりました。

水は、今日の私たちにとっては当たり前の存在であるため、水に対して問題意識を抱く機会はないかもしれません。しかし日本でも、特に今後は水の問題を抱える可能性があります。

私は、SDGsの認知度が高まるにつれて、全ての人が目標の一つである水について自分ごととして考えてくれたらと願っています。「水」の認知度を高めるために、今後もSDGsと向き合っていきたいです。

噛み砕き、使いやすく

長尾 森木

SDGsとは、世界中の人々が同じ指標をベースに考え、話し合い、そして協力し合うツールであると考えます。SDGsを利用して課題を解決する、持続可能な社会を創るという視点が大切で、SDGsがあるからそれに従わねばならないわけではありません。

SDGsの17の目標のうち、目標6が「水と衛生」をテーマにしています。一見関わりが薄そうな他の目標と水とのつながりを理解すべく、水×SDGsワークショップでは169の全ターゲットを一つひとつ見ていき、各目標が少なからず水に関連するという認識を得ました。

しかしながら、SDGsはいまだに途上国の話と思われていたり、日本の上下水道分野にどう関連付ければいいか分からないといった意見を多く耳にします。

そこでわれわれは、水とSDGsをどう関連付けるかという議論を重ね、上下水道分野への落とし込みを丁寧に行ってきました。その中で感じた最も重要なことは、SDGsが究極であることを考え、SDGsを噛み砕き、使いやすいように組み替えることで自らの職務に活用することです。

自身の目標に移し替え

矢口 光良

普段は何となく聞くようになった言葉でよく見えるけど、よく分からない。ただ、これからつくるビジョンを考える将来像に生かせるかなという思いで参加することにしました。日本で水は当たり前にあるので、もっぱら海外の話を考えていると思ったら、先進国も含め、社会経済環境にどんな変化が起きても水を送り続けられるか、持続可能な将来に向けてできることを自分ごとに考えることが分かってきました。

しかし、回を重ねて、私たちのやっているさまざまな業務の相互の関係は整理されているのか、やっている結果は未来とどうつながっているかを評価できるか、水を送るために水道以外のことを考えているかなど課題が見えてきます。SDGsで持続可能になるため必要な目標は示されているので、これから私自身の目標に具体的に移し替え、しかも、当初だけでなく都市、水循環、エネルギー、仕事の魅力、連携等幅広く考え、ビジョンへの活用に向け、引き続き向き合っていきます。

ワーキング参加者の気づき

本紙ではJapan－YWP「水×SDGs」ワーキンググループの参加者にアンケートを実施。議論で得られたSDGsに対する気づき等を紹介するとともに、参加者にとってのSDGsを一言で表してもらった。

議論からの発見 ワーキングの先に

○…水分野の中にいながらも他分野とのつながり・理解などを多く持つことが重要であることを再認識した。それができる一つのツールとしてSDGsという共通言語があるかと思う。理念を超えた有意義な活動になるよう、水×SDGsワーキングの活動に心から期待している。

○…水分野は、SDGsの具体的解決策として各ゴールに繋がりのある分野である。水分野における課題解決にSDGsを活用することはもちろん、水分野がこのゴールに貢献できるということを意識したい。

○…SDGsの啓蒙は小学生、中学生、高校生が主になると思う。日本の学校教育の中に「水循環」という分野を「理科」の内容に追加し、SDGs、環境保全の大切さを啓発していくことが重要である。化学反応式や自然循環実験をするフィールドワークなども行いながら、水環境保全を日本国の若い学生に普及していくことが求められている。そして水環境工学を志す大学生を増やし、これからのJapan－YWPの中心を担うメンバーをはじめ、水を志す若手を育成する基盤を醸成していきたい。

○…SDGsのターゲット（169個）は非常に数が多く、これを網羅しながら取捨選択していく作業は非常に骨の折れるものだった。どのようなワークにしたら自分自身と参加者がSDGsを理解し、自分ごととして捉えられるか、毎回とても頭を悩ませている。運営には非常に大変なことも多いが、同時に運営メンバーとの議論はとても刺激的で勉強になり、参加者の方々に「楽しかった」「有意義であった」と言ってもらえたことがとても励みになった。参加者がそれぞれさまざまな背景や思いを持ちながら毎回活発に意見交換してくれ、思いもよらない意見や視点を聞くことができるのもワーキングの魅力になっている。本ワーキンググループもいよいよ大詰めだ。この成果を参加していない方々にわかりやすく伝えるにはどのようにしたらよいかという最大の課題が待ち構えている。これをきっかけに少しでもSDGsや上下水道の議論に向き合う人が増えたらうれしい。

○…水資源が多い日本において水道が今後も持続するためには、SDGsを活用して、インフラの強靭化はもちろん、省エネ、水循環などあらゆる視点で施策を講じる必要があると感じる。国際協力やプラスチックごみの問題だけに偏ってはいけない。災害や退廃のために断水のまま放置される国民が存在し続け、国民を一人でも取り残すことがないよう深い問題意識が続いてほしい。

○…ワークショップに参加するまでは、SDGsの169のターゲットに対して水分野がこれほどまでに関わっていると想像していなかった。一見関係ないように思えることでも、少し考えると、水業界にいる私たちだからこそできる取組みも見えて来る。水分野の取組みがSDGsの目標達成に大きく貢献できる可能性を持っていることを今後はより多くの方々に広め、実際に繋げていきたい。

○…水業界は「エネルギー、都市生活、自然環境」などへの貢献の度合いが非常に高い業界であるからこそ、その取組みが引き起こすインパクトも必然的に大きいと思う。行政も民間企業も研究機関も、そもそもの事業活動がSDGsの目標達成に貢献しているのだと思う。しかし、一般層から見て、水業界はSDGs貢献の優等生としてみなされるポジションをがむしゃらにとりにいくことも必要と感じる。ともすれば、現場で働く人たちの誇りを回復、若い人として若者からみなされるようにもなる。次の仕様は元が高いだけに、そのインパクトを意図的に与えることも必要だと感じる。

SDGsを一言で

▽幸福への前段階▽地球星を愛する非常に重要な取組み▽広い視野に立った意思決定の枠組み▽雲の中の光かと思いきや足元の大地▽他人ごとじゃない。自分ごととして向き合う課題▽底力で、人の行動を変える世界規模の実験▽水の認知度を高めるためのもの▽世界中が協力できる便利なツール